

言頭卷

心眼の輝き

学長 水谷 幸正

この文を起草しているとき（八月三日）、ロスアンゼルスオリンピックの競技において、日本がはじめて金メダルを獲得したというニュースが入る。体操個人総合の具志堅幸司選手と、ピストル射撃の蒲池猛夫選手である。いずれも劇的な大逆転による優勝であった。優勝の感想を聞かれて、具志堅選手は「この世界に神様がいるなら、その力が私に演技をさせたのであろう。今日の演技は自分が自分でないようだ」と語り、蒲池選手は「無の心境で撃った。まだ実感がわきませんよ」と述べていた。まさに仏教でいう「無我」の心であり、「三昧」の境であるといつてよい。無心の境に、自分の能力を超えた他者からの働きかけを感じたとするならば、スポーツの極限こそ仏者の内観に通達してゆくものというべきか。

両選手はもちろんのこと、このオリンピックに参加している各国の選手の眼の輝きに爽快さを覚える。最近とみに増してきた、無気力・無関心・無責任な学生たちの輝きのない眼になれてきている私たちにとって、心技一体のスポーツに全力を傾ける選手たちの眼は魅力的である。これから始まる夏の甲子園野球大会の高校生たちの眼も、さらに一段と輝きを増すことであらう。

眼の輝きといえ、昨秋、中国新疆ウイグル自治区を訪れたときのウイグル人女性のすばらしい眼を忘れることができない。生活の貧しさにめげず、将来に希望と喜びをもって、活きいきと語る彼女たちと接するにつけて、生活が豊かになったわが日本人たちの欲ほけした、輝きを失った眼が反省せしめられる。貧すれば貪る、というが、そうではないようだ。豊かになればなお貪る、と言いたい。清貧というように、貧しているときのほうが心に輝きがある。

心の輝きが眼の輝きになる。かつて、盲学校学生弁論大会をテレビ録画で聞いたときの感激がいまなお強烈である。どの弁論もみなすばらしかったが、とくに心を打ったのは優勝者女子学生の弁論であった。「私の見つけた青い鳥」という題で、他人の親切にふれたことから彼女の人生観が変っていったことをたんと述べながら、「感謝の気持ちが必要ならば、人間は幸せになれるのだ、ということがよく分りました。私は一人で歩くことによって青い鳥を見つけることができたのです」と最後に結んでいた。全盲の彼女からまさしく心眼の輝きを見ることができた。眼の輝きは清浄な心にもとづく。清浄な心とは感謝の心である。宗教心とは結局のところ感謝の心である。

いま、たまたま、武蔵大学教授岩田龍子著『学生達が目を輝かすとき』を入手して読む。学生たちの潜在的な可能性を如何に引き出して、その生命力を躍動せしめるか。大学人として、まさに一読すべき書である。大学関係者の大方に薦めてやまない。